



第 20 号

平成 29 年 11 月 14 日発行

会 員 募 集 中

年会費 3,000 円

10 月以降入会 1,500 円

名誉顧問、柴田 一先生逝く



岡山歴史研究会の設立当初より、顧問そして名誉顧問としてご指導をいただいていた柴田一先生が去る 9 月 18 日、肺炎のため亡くなりました。享年 87 歳。先生は岡山大学卒業後、県内の高校で歴史の教諭を勤められ、次いで兵庫教育大学で教鞭を執られた後、就実大学の教授、そして学長に就任されました。専門は近世地方史、郷土の先人たちに光を当てられ、津田永忠、他に關する著書も多い。

岡山歴研の設立時、その方向付けを提示され、それに基づいて岡山県歴史関連団体便覧の作成に至りました。平成 23 年の全国歴史研究会、吉備の国岡山大会では記念講演をしていただきました。

柴田一先生を追慕す！

副会長 山崎 泰二

柴田一先生の訃報を知ったのは、9 月 22 日の山陽新聞の朝刊だった。密葬の様子であったので、会葬は控えたが、お悔やみの電報は届けた。

私が岡山での余生の一つに郷土史を学び始めた頃、津田永忠顕彰会の発足式が、表町の津田永忠屋敷の近くの両備グループの施設で開催された。

平成 10 年秋の 10 号台風一過の朝。(10 月 18 日)旭川の兩岸の道路一杯に濁流が渦巻く日だった。その席が初めて先生と接した場になった。

その後は先生の講演を聴くたびに、その人柄に陶醉して、追掛けファンの仲間になった。当時、先生は就実女子大学文学部の教授であったと記憶

歴・研・展・望

備前市伊部にある岡山県備前陶芸美術館が、備前焼ミュージアムに衣替えして丸 2 年。今、同ミュージアムで特別展「備前再発見一遠くて近い、近くて近い備前の仲間たちから見えてくるもの」が開かれている。

10 月 21 日、講演会があり、聞きに行った。講師は臼井洋輔館長。演題は「日本の大航海時代の華とリアルと滅びの暗号を秘めた希代の文化財 妙覚寺世界図屏風」。備前焼が古くから、船で、まさに波濤を越えて全国各地に運ばれていたかを世界図屏風からも読み解き、備前焼の底力を力説された。

岡山は歴史面でも、文化面でも、日本一のものも多く、掘り下げていけば光り輝くものが多い。臼井先生は吉備人出版から「岡山の文化財 日本人がおきわすれてきた光り輝やけるもの」という

本を出されている。工芸品から、建築物、人物、自然に至るまで各般にわたり、岡山の数々の物、人物を採りあげ、岡山文化のエッセンスを説いておられる。先生と話をする機会に、いつも感じるのは、この本の副題の「日本人がおきわすれてきた」、日本人ではなく「岡山人」にこそ、もっともって岡山の本当の素晴らしさを知ってほしい—と言う熱い思い、叫びである。

その臼井先生を基調講演者にお迎えし、「講演会 岡山の底力」シリーズを来春、開催したいと準備している。若い人たちにも岡山の素晴らしさを知ってもらいたいと思い、講演の後、県下の若手芸術関係者を交えての座談会も企画。先生と若い人たちの感性がどうぶつかり合い、どんな新しいものが見えてくるか—会員の皆さんと一緒に期待したい。(会長 大田弘之)

する。谷口澄夫元岡大学長の薫陶を受け、近世歴史学を専門に活躍され、後に就実大学学長を勤められた。

その後、平成 22 年、岡山歴史研究会立ち上げで前会長、天野勝昭氏らと語らい、発起人代表への就任を要請に何うと、二つ返事で快く引き受けて戴いた。官学民で郷土の文化・歴史を学ぶ事は先生の持論に叶うものがあつた。以来翌年の全国歴研・岡山大会の開催や沖新田一座の立ち上げに教えを乞うた。

中でも、全国大会の案内の総論を纏め先生に添削・監修をお願いした折、丁寧な指導を戴いた。

山本事務局長より聞いた先生の言葉が今も自戒の念として残る。

「これを書いた人物はどんな経歴の持ち主かね?」「当会の副会長で何度もお会いになっているでしょう」「顔は見て知っているがこれほどの歴史感を持っているとは?」との評価に山本氏も、これなら全国歴研の仲間に自信をもって披露できると思つたと、後に回想して伝えてくれた。

師は私とは干支で一回り先輩、佐藤光範顧問と同じ「午=うま」歳、以後可愛がっていただいた。87 歳で惜しまれながらのお別れになった。娘さんから丁寧な礼状を戴いた。

柴田 一先生を偲ぶ

編集長 楠 敏明

本会の名誉顧問をお願いしてきた柴田一先生が去る 9 月 18 日、肺炎のため、87 歳にて逝去されました。私にとっては倉敷青陵高校時代の恩師でもあります。

平成 22 年秋、岡山歴史研究会の設立総会を後楽園の鶴鳴館で開いた際、「大学の勉強は四年間で終わるが、耳学問をする気になれば一生できるぞ。津田永忠は中学も高校も出てないぞ。」と印象に残るお話をいただきました。

そして、平成 23 年度、全国歴史研究会、吉備の国岡山大会では記念講演をお願いしました。「岡山の礎、宇喜多家から池田家へ、岡山城・城下町と新田開発」と題する講演で、先生の持論である「不思議発見」から歴史を見るお話を吐露され、万雷の拍手を浴びられました。

昨年春、会報第 16 号に先生の初任地である林野高校での奮闘ぶりを綴った「新任教師の思い出」を載せる許可をいただきたく、入所されていた施設を訪ねました。脳梗塞を何回か患われて言葉の発音に少し支障をきたされていました。掲載の許可と写真を撮らせていただく積りが、高校時代あれほどお元気だった先生なのにとの思いが過ぎり、つい写真を撮影するのを躊躇しました。後で、娘さんに撮ってもらって会報に載せました。枕元には倉敷青陵高校時代の担任の教え子たちと一緒に写った写真が置いてあり、また、返事をまだ書いてないという年賀状の束のトップには私のクラスメイトから届いた賀状がありました。

柴田先生、ありがとうございました。

講演会「岡山の底力」シリーズ

第 1 回 「スピリット オブ オカヤマ」

日 時：平成 30 年 3 月 31 日（土曜日） 午後 1 時から

場 所：岡山市北区奉還町 2 丁目 2-1

岡山国際交流センター 8 階（086-256-2905）

基調講演：「スピリット オブ オカヤマ」 午後 1 時～2 時 30 分

講師 臼井洋輔・備前焼ミュージアム館長

座談会：臼井館長と若手芸術関係者 午後 2 時 45 分～3 時 15 分

会 費：会員 500 円 一般 1000 円

報告『邪馬台国は岡山です』－その1

邪馬台国の最低条件は「地名、太伯と黥面（入墨面）」です

会員 丸谷 憲二

1 はじめに

去る 9 月度の歴研サロンで、「邪馬台国は岡山です」と報告致しました。4 月から 10 月にかけて県内 11 カ所で巡回講演をさせていただき、「岡山県が邪馬台国である」ことを報告してきました。「邪馬台国は岡山です」の拠り所は、一次史料である室町時代の『日本書紀纂疏（さんそ）』、平安時代の『魏志倭国伝』そして邪馬台国時代の記録・国宝『翰苑（かんえん）』の内容を正しいとする説です。

2 「地名、太伯」との出会い

私が初めて地名、太伯を知ったのは、仕事で西大寺に着任した昭和 43 年、21 歳の時です。「岡山にはすごい地名があるんだなあ。」が第一印象です。21 歳の私は『太伯説』を知っていました。

『太伯説』とは、『呉国の始祖「太伯」が、後に倭国に渡来したという記録が、中国の歴史書である『魏略』『晋書』『梁書』に、倭人が「自ら太伯の後と謂う」と記されている』という事実です。歴史学では、太伯説は歴史的事実として根拠が無く、太伯も伝説上の人物とされています。

3 「大伯の由来」碑との出会い

平成 26 年 3 月 5 日、片山伸栄さん（備前市観光ボランティアガイド協会）一行の岡山市東区山南学区の案内を、近藤孝正氏（山南公民館 郷土史を楽しむ会）に依頼しました。

最初に岡山市立太伯小学校内の「太伯（タイハク）の由来」碑を案内していただきました。

片山伸栄さんが「大と太」の「、」の有無に関心を示し石碑の前から長時間動きません。「当初大伯の漢字を当て」とあり、「太ではなく大」とあり、「、」が無かったとあります。

私は、『この伝承は間違いであり、長年の間に「、」が消えた』と考えました。「大も太」も小学校で習う漢字です。国語の初歩的な間違いが、平成 8 年 11 月から平成 26 年まで 18 年間も訂正されていないことに驚きました。太伯小学校に着任された先生方も、初歩的な間違いを発見しても指摘できないのです。

3.1 「大伯の由来」碑の問題点

太伯（タイハク）地名に注目し 49 年になります。太伯（タイハク）地名は、吉備国の古代地名として最も重要な地名です。しかし、太伯地名は岡山県の歴史研究者に無視されてきました。

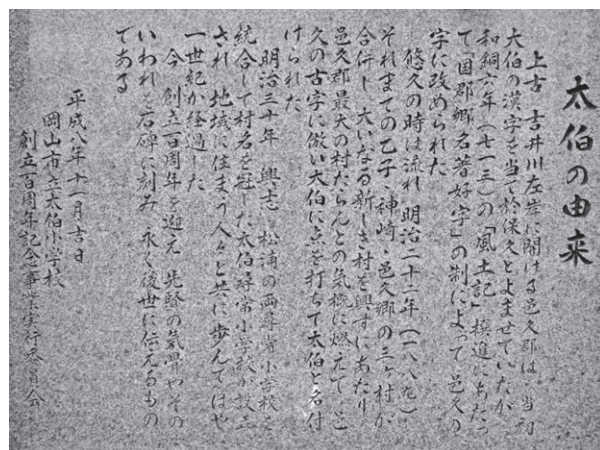
『太伯説』とは、「呉国の始祖「太伯」が、後に倭国に渡来したという記録が、中国の文献『魏略』『晋書』『梁書』に、倭人が、「自ら太伯の後と謂う」と記されている」という事実です。

「大」の漢音は「タイ」、呉音は「ダイ」です。最初は「呉音で太伯」と書き、漢音の時代に「、」の無い漢音の太伯（タイハク）と表記が変更され、それを明治 22 年に呉音のタイハクに戻したものです。これは、国語学、歴史学の基礎です。

3.2 誰が歴史を捏造したのか

漢音、呉音という国語の問題を、「太伯の由来」碑には「明治 22 年に乙子・神崎・邑久郷の 3 ケ村が合併し大いなる新しき村を興すにあたり、邑久郡最大の村たらんと気概に燃えて、邑久の古字に倣い大伯に点を打って太伯（タイハク）と名付けられた。」と創作しています。

まさに歴史の捏造です。



しかし、明治の賢人達は、古典にみられるオクの用字変化に着目して、『日本書紀』の斉明紀七年条に描かれる「大伯海」・「大伯皇女」の伝承や『先代旧事本紀』巻十の「国造本紀」に記された「大伯国造 輕嶋豊明朝御世。神祝命七世孫佐紀足尼賜国造。」、そして『続日本紀』巻六の和銅六年（713）五月甲子条に記された風土記撰進の詔の「国郡郷名著好字」の制を根拠としてオクの用字法が太伯から邑久へと変更されたことを理解し、邑久の古字を村名に採用したものと推察される。そして、邑久郡域最大の村へと発展することを願って、太伯に点を打って、大きいものの中でも最も大きいとの意味を持つ「太」に改変して太伯の漢字を用いて、オクとは読ませずタイハクと訓じたものと思われる。

単に、岡山県の歴史研究者が、『太伯説』を知らなかった、漢音の
 大伯(タイハク)と読めることを知らなかったというだけの話です。

地元民の立場からは、昨日までは大伯をオクと読み、今日から「」を付けたから、太伯(タイハク)と読むようにすることなどありえない話です。これは地名学の常識です。



岡山市立太伯小学校の『創立 100 周年記念』誌は、1996 年発行です。太伯の地名の由来を説明しています。皆様は説明に納得できますか。卒業生で内容を理解できた人はいないはずです。意味不明です。

この内容は、写真の先生たちのシンポジウムの結論です。「大も太」も小学校で学習する漢字です。なぜ、大学の先生が、小学校の漢字を誤読するのか。何故、小学校で習う漢字にルビを付けるのか。私たちは、ルビとは難しい漢字に着けるものと理解しています。大伯（漢音タイハク）を「オク（邑久）」と誤読しました。

3.3 「大」の漢音は「タイ」、呉音は「ダイ」

「大」の漢音は「タイ」、呉音は「ダイ」です。

最初は呉音で太伯と書き、漢音の時代に「、」の無い大伯（タイハク）と表記が変更されました。古代から地名は「タイハク」でした。漢音、呉音は古代史研究の初歩です。

参考文献も全て間違えています。『角川日本地名大辞典』には「明治22年から昭和28年の邑久郡の自治体名…大泊が太伯と書かれたものと思われる」とあり、『岡山市の地名』には「明治22年(1889)合併し太伯村となり」とあります。これらの著者は調査しないで、文献をコピーして紹介しているだけです。岡山県の郷土史家には、歴史研究とはコピーする事と理解している人が多いようです。

3.4 内務省地理局編纂『郡名異同一覧』説

しかし、当時の岡山県を代表する先生方が間違えたのではなくて、先生方は、明治7～24年に内務省地理局編纂の『群名異動一覧』説を正しいとして発表しただけなのです。内務省地理局編纂『群名異動一覧』説は間違いです。現在でも、内務省の調査結果が正しいとされ、オク（邑久）と誤読されています。内務省が間違えると、大学教授が小学校の漢字に間違ったルビを付けると考えました。常識としてルビとは難しい漢字に付けるものです。現在の国語教育や歴史教育では、コピーすること、つまり、記憶することが一番重要と教えています。だから、おかしいと思っても、誰も指摘できません。特に岡山県はコピー（記憶）教育です。

備				作			
三野		三野原 三野原				六國史古	御名畢 同一覽
同甲	石无		大佐			書	
御野	上道	磐梨	赤坂	品久	第七	真島	大庭
美乃	同	同	同	同	同	同	同

4 『魏志倭人伝』 以外の一次史料の発見

従来の邪馬台国論争は『魏志倭人伝』を基にした論争です。『魏志倭人伝』には邪馬台国の場所は記録されておりません。ですからエジプト・インドネシア説まであるのです。

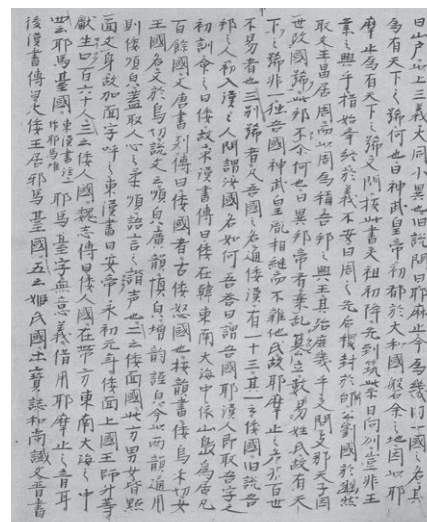
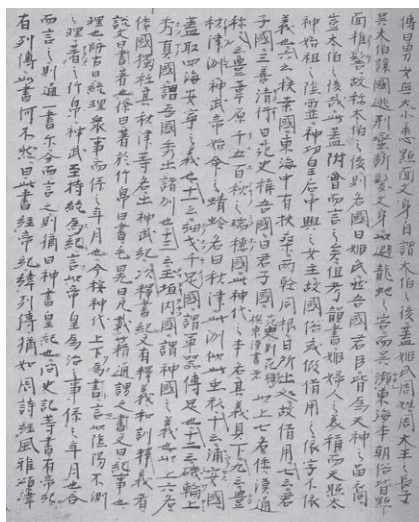
『魏志倭人伝』以外の史料を探して、室町時代（天理大学蔵）の『日本書紀纂疏（さんそ）』、平安時代（宮内庁書陵部蔵）の『魏志倭国伝』、邪馬台国時代（大宰府天満宮蔵）の国宝『翰苑（かんえん）』にたどり着きました。

全ての一次史料に、太伯説が記録されています。しかし、歴史学では、太伯説は、歴史的事実として根拠が無く、太伯も伝説上の人物であるとされてきました。その記録を私が地名学で解読し、「邪馬台国は岡山である」ことを発見しました。

岡山県の歴史学では、江戸時代の水戸学による太伯論争回避策として、「オク（邑久）」と間違えたルビがふられ、間違いが岡山の定説になってしまいました。

4.1 『日本書紀纂疏』の「太伯と 大伯」・・・室町時代の記録

『日本書紀纂疏』(さんそ)は、室町時代の『日本書紀』の注釈書です。・一条兼良著、全6巻。『日本書紀』の神代巻のみを注釈したものです。成立は康正年間(1455～1457年)です。神代巻の注釈書としては、室町時代を代表するもので天理大学蔵です。



『日本書紀纂疏』の、「太伯と大伯」との表記を発見し、「邪馬台国は岡山である」と確信して、岡山県内巡回講演を企画・実行しています。

『日本書紀纂疏』には、吉備国の古代史研究に必要なすべての情報が記録されています。

4.2 「姬氏国名者。倭国之名也」

平安時代の記録『日本書紀』は、平安時代の721～965年に7回の講書が行われました。『日本書紀私記零本丁本』は、平安中期の承平6年(936)に『日本書紀』を講じた博士の私記です。「姫氏国名者。倭国之名也」とあり、倭国が姫氏国と呼ばれていたことが記録されています。『中国姓氏辞典』に、「姫キ：周朝の宗室がこの姓を用い」とあり、周(BC1046頃～BC256年)は、殷を倒して王朝を開いた。国姓は姫(キ)とあります。姫(キ)氏は、「紀・木・鬼・基・城」等と表記されます。

4.2.1 天皇家の苗字・姫（子）氏

東海姫氏国、現在の天皇家には苗字はありません。平安時代の記録に、「わが国が姫氏と呼ばれるのはなにゆえか」とあります。平安

吉備真備の『野馬台詩』の解説が知られています。吉備真備が中国の皇帝から突き付けられた難題の一つです。この詩を読ませ、長谷寺の観音や住吉明神の靈験で蜘蛛が下りてきて、その糸を伝って解説できたという逸話です。

4.3 『御覧魏志』・『魏志倭国伝』・・・平安時代の記録

983 年成立の、中国の類書（古代の百科事典）『太平御覽』に引用された通称『魏志倭国伝』です。宮内庁書陵部蔵です。

『魏志倭国伝』は、297 年以前の成立です。『魏志倭国伝』に、太伯の記録が有り、『魏志倭人伝』に、記録がありません。宋慶元版です。

『魏志倭国伝』に注目した論文は、内藤湖南（京都帝国大学教授）の『卑弥呼考』と、昭和5年の末松保和の『太平御覧に引かれた倭国に関する魏志の文に於いて』です。

4.4 大宰府天満宮蔵の国宝『翰苑（かんえん）』・・・ 邪馬台国時代の記録

国宝『翰苑（かんえん）』は、唐（618～907）の張楚金撰の類書（古代の百科事典）です。『魏略』38巻は、263年には成立していました（白崎昭一郎説）。根拠は、司馬氏に対する批判的な内容です。

『魏略』逸文五収載『翰苑』卷第三十、太宰府天満宮に第30巻と叙文のみが残っていました。

『魏略』は、『魏志倭人伝』より邪馬台国に近い時代に書かれており、内容は正確と考えます。

国宝『翰苑』が復刻出版されたのは、昭和51年です。大宰府天満宮宮司の西高辻信貞氏は、『翰苑』はアジア史や古代史研究に重要であり、「幻の史書」として高名である。古代大宰府の持つ意味や、文化の伝統を誇る大宰府天満宮の歴史にとって非常に重要な意味をもつと説明されています。

『翰苑（かんえん）』の、邪馬台国論への採用は、和田英松（東京帝国大学史料編纂所・

日本紀私記零本 卷首欠

面國遣使奉獻注曰倭國去樂浪萬二千里男子皆黥面文身以別
尊卑大小云。

問倭國之中有南北二倭其意如何。

師說延喜說云北倭可爲此國南倭女國云。此說已无證據未爲
全得又南北二倭者是本朝南北之邊州也无可指別由。

問此倭字訓其解如何。

師說延喜說漢書晉灼如淳各有注釋然而惣无明訓之字也今案
諸字書等中亦无指讀之。

問耶馬臺耶摩堆耶摩堆之号若有各意乎。

師說今案雖有三号其義不異皆取稱倭之音也。

問此國稱倭氏國若有其說乎。

師說國時實志和尚識云東海姬氏國又本朝僧善標推紀云東海
姬氏國者倭國之名也今案天照大神者始祖陰神也神功皇后者
又女帝也依此等稱姬氏國。

問書紀二字乎合讀乎不美止云其意如何。

師說先師之說讀書紀二字爲書今亦依之。

問書紀二字訓釋不同若各相別讀者如何。

師說此若相分讀者雖義可叶而文已煩碎仍不別讀。

問兩字乎一字亦讀成若有所據乎。

師說此書之例或以一字讀成兩訓或以二字讀如一字其近文則
合牙波菴類乎合止讀又神聖國只神止讀等也。

「日本書紀私記」『新訂増補 国史大系第八巻』 昭和 44 年 吉川弘文館

魏志曰倭國帶方東南大海之濱依山島爲舊國百餘小國漢時有朝見者今亡。使譯所通北戶十餘國從帶方至倭倭海岸水程數國所居南行東到其北岸約耶縣國七餘里至海島國百三十餘里。大官曰卑彌斯國男女奴隸隨國所居絕島方四百餘里地多山林無民自食海物自活乘船南北。市糴又南渡一海一千里名曰韓海至一大國置官與對馬同地方百里有竹木養林有三千許家亦有田地耕田不足食方行市糴又渡海千餘里至末盧國四千二百瀛山海居民人善捕魚無深淺皆能沉沒取之。東南陸行五百里到伊都國官曰爾支司世世襲領柄槩率國賦有千餘戶世王皆統屬女王。帶方便往來常止住又東南至奴國百餘里置官曰先馬爾國卑彌斯有千餘戶世王皆統屬女王。里不至奴國千餘置官曰多模陵曰奴奴國又南水行二十日至於投馬國。萬置官曰彌彌刺曰彌彌鄉利又南水行十日換行曰奴奴國又南水行七萬女王之所都其置官曰伊支馬次曰彌馬叔次曰彌馬媛次曰奴倭媛次曰彌彌小國有二十一皆統之女王之南又有狗奴國男子爲其官曰狗石智卑狗者「不屬女王也」。自帶方至女國萬二千餘里其俗男子無衣皆露面文身聞其書語自謂太伯之後又云上古以來其使詣中國卑彌斯說事或跪或跪兩手據地謂之恭敬其呼應曰噫噫如然語矣。

又曰倭國本以男子爲王蓋聖帝光和中國亂相攻伐無定乃立一女子爲王名卑彌呼事鬼道能惑衆自謂年已長大無夫無弟有男弟佐治國以婢千人自侍唯有男一人給飲食傳辭出入詣其居處宮室樓閣城守衛衛嚴峻最初三年公孫洲死倭女王遣大夫難升米來貢幣方賜求詣天子朝見太守劉更送詣京師奏報其狀所獻男生四人女六人班布一疋詔書賜之。賜錦袍七種五尺二寸刀銅鏡口口口口珠珍丹之屬付使還又封倭王印綬書曰女書家國殉葬者百餘人更立男王國中不更相殺數千人於是復更立卑彌呼女妻年十三爲王國中遂定其倭國之東渡海千餘里復有國皆倭種也又有朱中國國在其南人長二四尺去倭國四千餘里又有縣國墨德在其南船行可一年至。

倭國
 憑山負海鎮馬臺以達都
 倭漢書曰倭在朝鮮東南
 大海中倭山島者凡百餘
 國曰此帝統朝鮮使譯通漢於者報餘國雖至其大倭王
 治馬臺樂浪郡倣去其國方二千里其地大較在會稽
 東與越在應可相近魏志曰倭人在帶方東南吳國
 徂夷地在海中洲背之山或地絕遠國說可五千餘里
 四面無住諸目皆同
 東南絕無眾至其間也
 分職命官統女王而列部
 魏略曰倭國
 諸方至倭國海岸水行百餘里到狗肥縣國七十餘里始
 度一海十餘里至對馬國其大宮宮曰卑奴無臣
 曰南十餘里而度海至一父國宮宮曰野間地方三百里
 又度海十餘里至末盧國國人善射能浮沒水戰之東國
 五里至對馬郡曰戶餘貨曰新末國
 日漢書曰狗肥縣其國王皆名王女也
 早弥城感翻叶群情
 臺與幻方諧聚望
 後漢書曰安帝永初元年有倭
 王遣使詣魏居年並至有
 上王王呼亦王相連之間倭國大水
 不順更相誅伐復至早弥時宗女委與年十三為玉國中蓬童
 其國有智史馬次曰孫馬次
 次曰孫馬次曰似佳親之也
 文身刺面猶稱太伯之苗
 魏略曰女王之南人有刺面女男子為王其吉日刺右臂臂肉
 不屬女王也日有刺面女男子為王其吉日刺右臂臂肉
 文則其舊語謂太伯之故有吳王小處女子封於會稽新
 倭文身以避蛇龍之害今
 阿輩雜亦自表天兒之稱
 宗
 兒
 兒
 宗
 兒
 兒

日本史）と橋本増吉（慶應義塾大学教授・東洋史）が知られています。

5 邪馬台国の最低条件

邪馬台国決定の最低条件は、「地名、太伯（大伯）と鯨面（入墨面）」です。

5.1 タイハク地名の全国調査結果

タイハク地名の全国調査を行いました。太伯（大伯）地名は岡山にしかありません。

5.2 倭人は大伯の子孫

「倭人は太伯の子孫」と、『翰苑』に記録が有ります。邪馬台国から中国へ出かけた使者たちは、「自分たちは大伯の子孫である」と名乗っていました。

邪馬台国では、男は身分の高さに関係無く、皆入墨をしていました。この記録に林羅山（儒学者）が目し、徳川光圀の『大日本史』の執筆動機として知られています。

5.3 「太伯」、中国史書各倭伝の対照

『魏略』・『御覧魏志』に、「其の旧語を聞くに、自ら太伯の後なりと謂う。」とあり、『梁書』・『晉書』・『北史』に、「自ら太伯の後なりと云う」とあります。記録が無いのは、『魏志』『後漢書』『宋書』『南齊書』『隋書』『南史』です。記録なしの理由は、著者の呉国に関する考え方の相違によるものと思います。

6 周辺の呉国・関連地名

太伯（呉音・タイハク）・大伯（漢音・タイハク）地名は、吉備国のみです。つまり、邪馬台国は吉備国にありました。ならば、周辺に呉国・関連地名があるはずですが。

6.1 麻御山神社の記録

太伯に、麻御山神社（オミヤマ・岡山市東区邑久郷）の神山を麻御山という。『岡山市神社誌』に、「神武天皇の御東征に御供をした者が、天皇が吉備の高島に御滞在のとき、詔によって斎服を調進するため、ここに麻を植え紡績なさったのがもととなって奉斎した神社とあります。」

応神天皇が阿知使主・都加使主を呉へ派遣して縫工女（キヌヌイメ）を求めたのは、即位 37 年春 2 月 1 日です。太伯の近くに阿知地名があります。



7 吉備の穴海と縄文海進

約 6,000 ～ 7,000 年前の縄文海進期には、海水面が現在より、数 m 高く岡山平野は海でした。太伯は島であり、吉備の穴海でした。

8 考古学者の吉備邪馬台国説

8.1 春成秀爾説（国立歴史民俗博物館名誉教授）

卑弥呼は吉備出身か。箸墓古墳に竜のデザイン。築造は 240 ～ 260 年、箸墓古墳・卑弥呼の墓説。2011 年 3 月 2 日読売新聞

8.2 松木武彦説（岡山大学教授）

楯築墳丘墓の埋葬者は倭国王 帥升（すいしょう）。107 年に後漢に朝貢した日本史上、外国史書に名の残る最初の人物です。倭国王帥升等が生口 160 人を献上しました。范曄著の『後漢書』。箸墓古墳・卑弥呼の墓説。2012 年 11 月 22 日 山陽新聞

9 従来説

9.1 岡山市教育委員会 吉備国は投馬国説

「特別展 投馬国の考古学」、邪馬台国畿内説に立ち、邪馬台国へ至る直前の国、投馬国（トウマ・ツマ）説です。2014 年 岡山市埋蔵文化財センターにて展示会。

9.2 岡山県教育委員会

平成 2 年 『岡山県史第三巻 古代』に、「考古学上の成果に基づく吉備社会のあり方と、『倭人伝』の記述する三世紀の倭人社会のあり方との間に、何らかの接点を求める必要に迫られる。」とあります。

10 『魏志倭人伝』の問題点

『三国志』の著者、西晋の陳寿（233 ～ 297 年）は倭国へ渡来していません。陳寿の旅行記録と信じている人が多いようです。旅行記録だから『魏志倭人伝』が正確であると思ひ込んでおられます。邪馬台国について書かれた史料は、『魏志倭人伝』しかないと思ひこんでいる研究者が多いです。県内の巡回講演に参加されている人達もそうでした。

10.1 『魏志倭人伝』からの「思い込み」

- ① 卑弥呼を、倭国うまれ、渡来人とは無関係と考えている。
卑弥呼は、呉国からの渡来人の末裔です。
- ② 卑弥呼は、漢字を読み書きできたのか。
当然、漢字は習得していました。通訳なしで会話もできました。
- ③ どのような船で大陸へ渡ったのかが書かれていない。

文献において、海を渡る記述があいまいである。長野正孝説

倭国へ渡来してきた船があり、一族は航海術も習得していました。

海洋史・土木史の長野正孝説（元武蔵工業大学教授）では、卑弥呼の時代、瀬戸内海は航路が未開発であり通行できなかった。瀬戸内海は、古代の船にとって航路をつくるのが難しかった。現代の歴史学者は、瀬戸内海は普通に通れると疑問を持たないが、交易は主に日本海側で行われていた。当時の航海技術や地形に基づき、海人の身になって丹後半島の遺跡に身を置けば、鉄と翡翠で繁栄する王国の姿が見えてくるとして、邪馬台国・丹後半島説を主張されています。

私は、『魏志倭人伝』の「南の邪馬台国女王卑弥呼の国に着くには、海上の航行十日と陸路の歩行一箇月とがかかる」の出発地は丹後半島か敦賀かと考えました。この陸路の歩行一箇月は、山陰に船を放棄して陸路歩行と考えます。従来説は、『魏志倭人伝』に書かれていない内容、つまり、「考古学上での古代都市論」での、創作された邪馬台国説ばかりです。

11 邪馬台国論争の開始 1716 年

邪馬台国論争の開始は、1716 年成立の新井白石の『古史通或門（こしつうわくもん）』です。「魏志は実録に候」と。「邪馬台国大和国（こく）」⇒「筑後国山門（やまと）郡」

1777 年成立の『馭戎慨言（からおさめのうれたみごと）』で、本居宣長は（やまたいこく）と読み、大和朝廷とは別の九州の小国「九州熊襲説」を発表しました。この二人が邪馬台国研究の先駆者であり、江戸時代からの、300 年論争の原点です。

12 何故、論争が決着しないのか

邪馬台国論争の現状を製造工場で事故原因を調査している事例で説明すると、事故原因で無い場所を一生懸命に調査している状態です。『魏志倭人伝』では、邪馬台国の場所はわかりません。どうして、別の古文書『魏志倭国伝』を調査しないのでしょうか。邪馬台国で無いところを、一生懸命探しても何も出てきません。関係の無い場所をいくら探しても、分かるはずがない。この当たり前のことに気がつかない研究者がとにかく多いことか。これが、邪馬台国論争の現状です。

13 邪馬台国は、吉備国内を探せ

- ① 239 年に邪馬台国の卑弥呼が、魏の首都洛陽に使者を派遣し、明帝から「親魏倭王」に任じられました。魏が邪馬台国に与えた金印「親魏倭王」が墓地から発掘されれば証明です。『三国志』巻二八の王凌伝「印綬を墓葬に際して埋めさせた」との記録が有ります。金印以外に銀印、銅印も複数発見されます。大夫（たいふ）・次使（じし）であった難升米（なんしょうまい）や都市牛利（としごり）達も銀印を貰っています。杉本憲司説（仏教大学名誉教授）
- ② 卑弥呼の墓に殉葬された奴婢百余人という殉葬者が発見されれば証明です。
蘇哲説（金城大学教授）

14 吉備邪馬台国説の出版

吉備邪馬台国説を最初に発表されたのは、岡崎春樹氏です。平成 5 年に牛窓町文化祭で、岡崎春樹説による邪馬台国バスツアーがありました。しかし、出版は最後になりました。

- | | | |
|---------------|------|-------------|
| ① 『吉備の邪馬台国』 | 岡崎春樹 | 2013 年 12 月 |
| ② 『邪馬台国 吉備説』 | 廣島輝治 | 2009 年 1 月 |
| ③ 『吉備の邪馬台国』 | 若井正一 | 2009 年 6 月 |
| ④ 『吉備邪馬台国東遷説』 | 岡将男 | 2014 年 1 月 |

15 『史記』趙世家「黒齒雕題」

「文身黠面（ぶんしんげいめん）して、猶（なお）太伯の苗（びょう）と称す。』『隋書』では「黠臂黠面文身」、『魏志』では「黠面文身」。『史記』趙世家では「黒齒雕題（こくしちやうだい）」、「黒い歯をして額に入墨」が

呉人の風俗とあります。

『史記 呉太伯世家』に、「その俗、男子は、皆、點にして文。その旧語を聞くと自ら太伯の後という。昔、夏后少康の子は会稽に封じられ、断髪文身して、蛟龍の害を避けた。今、倭人はまた文身し、もって水害をはらう（厭）。」とあります。倭人は自ら「太伯の後」と記録され呉人が渡来していました。『翰苑の解説と分析 塚田敬章氏』より抜粋

15.1 香登のお歯黒と入墨

お歯黒に使用していた黒色素は、入墨にも使用されていました。香登のお歯黒の特徴は、硫酸鉄（ローハ）とヌルデの木にできる五倍子の粉とを混合していました。混合物は水を入れると真黒となり、之を房楊枝で歯に塗っていました。科学的根拠を持った手法です。山賀礼一説（大阪大学名誉教授）です。一般的な黒い色素は、「タンニンと鉄の化学反応を利用」していました。

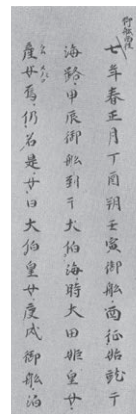
従来の香登のお歯黒起源説は、「唐僧鑑真和尚持参の日本隋一の特産物である」でした。

お歯黒は邪馬台国の時代からと推定可能です。

16 爵「大伯」銘文の発見



「大伯」の銘文が刻された「爵（シャク）」を発見しました。蓮昌寺（岡山市北区田町1丁目）の仏住山蓮昌寺仏教美術館並資料館に4個の爵があります。3本の足で支え、上部に注ぎ口と紐を括りつける突起がある器です。酒や水を注ぐ時に用いられました。購入先は四国屋島のドライブインです。邪馬台国・丸谷説の範囲内です。



17 大伯の一次資料

『神道体系』収録 「日本書紀下」の大伯です。661年にはルビがありません。漢音のタイハクの初見です。

（つづく）

歴研サロン3月例会

『中国銀行五十年史』より見た銀行の発展と逸話』 一後編

高橋 義雄（会員）

1 はじめに

大正の末までに、岡山地域の多数の小銀行は第一合同銀行（本店岡山市、頭取大原孫三郎）と山陽銀行（本店苫田郡津山町、頭取土居通博）の二大銀行に収斂した。しかしながら、両行は昭和2年の金融恐慌に遭遇して多額の不良資産を抱えたため合併し、新たに中国銀行（中銀という）として昭和5年12月に設立された。誕生した中銀は資本金1,500万円、本店岡山市、頭取大原孫三郎、支店62か店、出張所70か店、預金9,200万円、貸出金7,700万円、職員943名の規模を擁する地方銀行有数の銀行であった。営業エリアは岡山、広島、兵庫、香川、愛媛の広域に亘って

た。地方銀行有数の規模の銀行としてスタートした。

2 大原孫三郎頭取の銀行経営

（1）大原頭取の銀行経営理念

大原孫三郎頭取（以下大原頭取という）は比類ない先見性、積極性、理想主義を基底に経営を進める。大原頭取は倉敷銀行（以下倉銀という）を核として第一合同銀行を設立、次いで山陽銀行と合併して中銀を設立した。大原頭取は「地方的銀行合同」及び「一県一行」の先駆者といわれる。時代に先駆した大規模銀行設立により、岡山地方では大規模な銀行破綻が発生しなかった（東大教授粕谷誠）。

(2) 中國銀行の苦難の出発

大原頭取は多額の不良資産を抱えている中銀の経営に腐心する。合併の最大眼目は経営効率化を図り、信用維持のために利益を確保することにある。経費のうち 60% を占める人件費の削減と人員整理が鍵であるが難題であった。昭和 6 年 1 月の政府の官吏減俸に倣い、中銀は幹部が 20 ～ 30%、行員が 10% の減俸を実施した。幹部は厳しい考課、遠隔地への転勤命令、新採用の抑制を実施した。その結果、行員数は昭和 10 年末には 631 名となった。店舗は昭和 10 年末には 109 か店までに整理した。こうして経費節減に努めた結果、經常支出に占める経費の割合は 21.7% に減少した。

(3) 預金減少と日本銀行からの特別融資

預金が昭和 6 年以降減少を続け、遂に 7 年上期には 500 万円も大幅減少を来した。経済不況、農村不況、企業不振等に加えて不良資産問題も影響していた。剛胆で聞こえた大原頭取も 2 週間眠れなかった。遂に手元資金が窮迫して昭和 7 年 2 月 20 日、日銀岡山支店に特別融資を申し込む。6 月 29 日には借入残高は 159 万円に達した。しかしその後の営業努力により、8 月 17 日には全額返済できた。中銀史上最大の危機は脱出できたのである。

3 戦時体制下の中國銀行

(1) 大原頭取から公森頭取へ

大原頭取は還暦と狭心症悪化から、昭和 15 年 1 月 6 日の取締役会において頭取退任を表明した、公森太郎朝鮮銀行副総裁が同月 30 日開催の取締役会にて第 2 代頭取に就任した。公森太郎は明治 15 年 3 月 6 日生まれで、窪屋郡撫川村（現岡山市撫川）出身。東京帝国大学を卒業後明治 41 年大蔵章に入省、昭和 5 年退官し日本興業銀行理事を務め、12 年 4 月から朝鮮銀行副総裁を務めていた。

(2) 不良資産の償却

不良資産が貸出金の 6% という多額に上るが、



終戦当時の中國銀行本店

収益環境が厳しく償却できる状況にはない。大蔵省は不良資産整理を厳しく迫り、中銀は大蔵省の支援を断り、自主再建の道を選び、昭和 7 年に償却計画を策定した。懸命の努力の結果、7 年で償却を終えた。大蔵省は自力更生のモデルとする。

4 戦後の中國銀行

(1) 救国貯蓄運動の展開

政府はインフレ高進防止のために、昭和 21 年 2 月 17 日、金融緊急措置令により預金封鎖を行い、旧円回収、旧円証紙貼付、新円交換、封鎖預金支払事務等が行われた。そのため銀行業務は毎日深夜に及び、行員は疲労困憊となる。昭和 21 年 11 月通貨対策本部が設置され、救国貯蓄運動が全国的に展開された。日銀の岡崎嘉平太貯蓄推進委員は 10 月 17 日を貯蓄の日と定める。中銀の昭和 21 年 8 月～ 23 年 3 月迄の預金増加率は 94.7% となり、地銀平均の 88.9% を大きく上回った。

(2) 公森太郎頭取から守分十頭取へ



昭和 21 年 4 月 27 日、公森頭取は退き、守分十専務取締役が第 3 代頭取に就任した。公森頭取は戦時の苛烈な 6 年間、全行員の統率を図り、難局を乗り越えてきた。しかし、日本興業銀行理事、朝鮮銀行副総裁などの経歴があったため、21 年 1 月 4 日の GHQ メモランダムにより頭取を退任することになった。守分十頭取は明治 23 年 5 月 10 日に浅口郡玉島に生まれた。高粱中学、第六高等学校、京都帝国大学法学部を経て、北海道拓殖銀行に入行した。大正 11 年 6 月、第一合同銀行に支店長代理として大原頭取の招聘により破格の待遇で入行した。入行の翌年、経営の行き詰まった山陽商業銀行の支配人として派遣されて再建に尽力した。

5 銀行勘定における資産評価

金融機関経理応急措置法に基づき、新旧勘定の分離が行われる。昭和 21 年 8 月 11 日午前 0 時現在で、21 年上期の臨時決算を行い、これをもとに銀行勘定と信託勘定の資産、負債をそれぞれ新勘定、旧勘定に分離した。新勘定には、現金、預け金、国債、地方債等の確実な資産が組み入れられた。旧勘定には貸出金 92.2%、有価証券 16.3%、預金 58.3%、株主勘定 100% が繰り入れら

れた。次いで戦時補償の打ち切りに伴う旧勘定の整理が具体化されて、22 年 9 月に資産、負債の評価基準が決まった。新勘定では評価損が発生しなかったが、旧勘定に移された資産の殆どが軍需関連企業向けのものや満州帝国国債、朝鮮所在の土地など切捨て率の高い資産が多く含まれていたため、多額の評価損が見込まれた。これらの殆どは国策に従ったものであるが、多額の評価損見込みから中間処理が不可能とみなされた。その結果、中銀の資産内容は地方銀行ワースト 5 と評価された。

6 自主健全経営方針の確立

(1) 日銀岡山支店からの借入れと返済

昭和 22 年頃から産業復興資金需要が巨額に上り、貸出金が急増したが預金低迷のため、資金逼迫を来した。そこで昭和 23 年日銀岡山支店から 3 億 8,000 万円の借入れを行う。この金額は預金に対して 12% と高率であるため、全行員に「預金増強に邁進するよう」訴えた。また非常措置として貸出抑制方針を打ち出した。そして血の滲むような預金獲得活動により、昭和 24 年 9 月末には日銀借入れを返済することができた。

(2) 自主健全経営方針の確立

昭和 25 年上期の営業報告書に「一層自主的、健全経営方針を堅持し、常に如何なる変動にも対処しうる体制を整備し、使命の達成に万全を期す」とその決意が述べられた。「自主」とは「銀行の営業資金を借入れに頼らず、資金の一切を預金で充足」するという意味。「健全経営」とは「ドレッシング、特別利息付与の排除、貸出内容の良化、経費の徹底した節約、少数精鋭主義の実践、利益積立による自己資本充実など、オードックスな銀行経営の基本厳守、実行」である。

(3) 堅実貸出方針と地元中心の貸出

守分頭取は昭和 2 年の金融恐慌に遭遇した経験から、「銀行は倒産するもの」と言って、油断しなかった。貸出に際して、真摯に経営する者のみに融資した。融資方針は地元中心であり、地元中小企業に対して必要な設備資金や長期運転資金を供給してきた。貸出に占める中小企業向け貸出の割合は貸出先数で 98% 以上、金額で 60 ～ 70% を占めていた。この数字は地方銀行の平均を 10% 以上、上回っていた。

(4) 内部留保の充実

中銀の自己資本比率は昭和 5 年の創立時に 16.3% であったが、24 年 3 月にはわずか 1.95% で、地方銀行平均 2.43% を下回っていた。銀行

の自己資本は預金に対する保証であり、大蔵省は経営基盤の強化と預金者保護の観点から自己資本の充実を指導する。中銀は毎期の利益金積立てにより内部留保の充実を図る。経費の徹底的な縮減に加えて貸出金利息の顕著な伸びもあって償却前利益は地方銀行の上位、3 ～ 4 位を競うようになった。利益金の 70% 位を内部留保とした。その結果、昭和 30 年 3 月で自己資本比率は 7.95% へ急上昇、地銀平均の 6.43% を大幅に上回った。

8 自主健全経営方針の堅持

守分十頭取以下全役職員が懸命に再建に取り組んだ結果、遂に昭和 43 年上期の大蔵省検査によって、「中銀の経営内容が優秀」と高く評価された。昭和 45 年 2 月に大蔵省は銀行株式配当規制緩和方針を示した。中銀は 45 年度上期決算において株式配当可能限度を 26.79% と全国の銀行の中で最高の数字を示したので、一躍優秀さが知られた。45 年上期に普通配当 13%、記念配当 2% の合計 15% 配当を行い、同年下期に普通配当のみで 15% 配当を行った。51 年 9 月末には自己資本比率が 9.7% となり、地銀平均の 6.6% をはるかに上回り、地銀トップに位置した。

9 中国銀行創立 50 周年を迎えて

(1) 守分十頭取から守分勉頭取へ

昭和 52 年 1 月 22 日、守分十第 3 代頭取が現役のまま死去した。享年 86 歳、終戦後の 21 年 4 月 27 日、第 3 代頭取に就任以来、実に 30 余年に及んだ。不撓不屈の信念と優れた指導力、卓越した経営手腕によって中銀の再建を成し遂げた。「自主健全経営」を断行して、終生これを貫き、全国銀行中最優秀の経営内容を誇る銀行に築き上げた。「之貫以一」（『論語』里仁編より）を信条とし「忠恕」（『論語』里仁編より）の心を持って経営に邁進した。自身も質素検約に努め、地道に着実に経営の王道を歩んだのである。

(2) 守分勉第 4 代頭取の就任

守分副頭取が 1 月 22 日、第 4 代頭取に選任された。守分勉頭取は自主健全経営を継承し、一致団結して総預金 1 兆円の達成を訴える。中銀は新時代に即応した経営に邁進し、53 年 3 月には念願の総預金 1 兆円を達成した。次いで昭和 55 年 12 月 21 日（記念日）に 1 兆 3,590 億円を達成する。中銀は戦前、戦後の数々の苦難を乗り越えて、創立 50 周年記念日を迎え、地域に貢献する金融機関としてさらなる発展を誓ったのである。

岡山歴研 歴史探訪会「ひるぜん高天原伝説の探訪」

会員 井上 知明

去る 10 月 1 日（日）、爽やかな初秋の風を満喫しながら、蒜山高原への歴史探訪会が行われました。岡山県北の蒜山に高天原がと言うと驚かれる人が多いのですが、現地には蒜山高原こそが高天原であったという考えをお持ちの方がおられます。それは、アマテラス神話に関連する神社や、天の岩戸と呼ばれている岩屋、鶏声（とりごえ）という地名などが一帯に存在しているからです。

さて、当日の参加者は、会員 25 人、一般 18 人の計 43 人で、朝早くバスで岡山・倉敷を出発、途中の岡山道高梁サービスエリア付近ではすばらしい雲海を眺めることができました。

当会顧問の佐藤さんの軽妙な話を楽しみながら、米子道湯原インターで高速道を降り、まずは中和（ちゅうか）神社を訪れました。この神社は道中安全の神様を祭っており、惑星探査機「はやぶさ」の帰還成功にも御利益があったとのこと。また、境内にある三本の大杉は根元近くでつながっているように見え、大変立派なものでした。境内の一部が小学校の運動場になっていることにも驚きました。



中和神社

次に行った長田神社は「延喜式」にも出てくる古社で、アマテラスの稲植えに由来するとされて毎年 5 月 5 日に行われるお田植え祭は有名です。立派な注連縄に感嘆しました。



長田神社

その後、蒜山郷土博物館と隣接の四ツ塚古墳へ。二組に分かれて、博物館の前原茂雄館長と学芸員の深見かずみさんの案内で、館内の展示や四ツ塚古墳群を見学しました。古墳は 6 世紀のものとされ、全部で 19 基（現存 16 基）。そのうち特に大き

い古墳が 4 基あるので、こう呼ばれるようになったそうです。1 号墳は中へ入れるようになっており、腰をかかめて中に入ると案外広くて驚きました。

引き続いて、環境省の名水百選にも選ばれている「塩釜の冷泉」を訪ねました。冷泉はひょうたん型の池の中から湧き出ており、水温は年中 11 度だそうです。地元の生活用水としても使われています。冷泉の水を味わってみると、塩素消毒されている水道水とは違って、水そのもののおいしさが感じられました。

楽しみの昼食は、ヒルゼン高原センターで。ジンギスカンとはいかず、蒜山郷土料理に舌鼓を打ちました。地元、真庭市の太田昇市長も駆けつけて下さり、歓迎のあいさつをいただきました。

午後は、地元の蒜山神話ロマンの会から宮永優さんと清友やよいさんにも加わっていただき、茅部（かやべ）神社へ。茅部神社は主祭神がアマテラスで、天の岩戸のお膝元の神社です。春には 1 キロメートルの参道を美しい桜並木が彩るそうです。文久 3 年（1863）



茅部神社

に作られた石造の鳥居は高さが 13 メートルもあり、石造のものとしては日本一だとか。近くのハーブガーデンの入口まで行き、ここから二組に分かれて、健脚組は天の岩戸まで約 25 分の急坂を山登り、脚に自信のない人はそのままハーブガーデンを楽しみました。その後、米子道蒜山インターから帰路に就き、倉敷には予定より少し早く帰着しました。

今回の探訪会は、天気にも恵まれ、蒜山地方のアマテラス神話に関連した幾つかの神社や天の岩戸などを巡ることができ、ひょっとしたら神話の世界の高天原はここにあったのではないかと思います。おもしろい旅になりました。

最後に、この探訪会の企画や当日の運営等でお世話になった当会の工藤博さん、井上秀男さん、藤原康正さん、及び企画段階から当日まで終始御指導いただいた佐藤光範顧問にお礼を申し上げます。

岡山歴研サロン 11 月例会

「日本初の飛行機を作った医師 岸一太」

岡山市出身の医師で、ドイツに遊学後、耳鼻咽喉科の医師として東京で開業。そして大正 4 年、自ら開発した発動機を機体に付けた飛行機「つるぎ号」を製作、昭和 6 年、赤羽飛行機製作所を設立した。

講 師：坪井 章（会員、矢坂山を語る会）

日 時：11 月 16 日（木）13：30～16：00

場 所：ゆうあいセンター 2 階

申込先：FAX 086-806-2525（山田）

TEL 090-7130-2636（長安）

岡山歴研サロン 1 月例会

「弓削道鏡に関わる 3 人の吉備人」

奈良時代は仏教文化や史書の編纂がされた文化の時代であると共に変や乱の時代。中でも弓削道鏡事件は有名。これに関わる 3 人の吉備人、吉備真備、上道斐太郎、和気清麻呂についての講演です。

講 師：富久 豊（歴史小説「闇人」「闇人Ⅱ」の作者）

日 時：1 月 18 日（木）13：30～16：00

場 所：ゆうあいセンター 2 階

申込先：FAX 086-806-2525（山田）

TEL 090-7130-2636（長安）

歴研新春ウォーキング

倉敷市美観地区周辺

日 時：平成 30 年 2 月 18 日（日）

9 時 30 分～12 時 30 分（雨天中止）

集 合：JR 倉敷駅改札口（9 時 30 分集合）

参加費：会員 500 円 一般 700 円

（但し有料施設入館者は別途自費）

参加申込：①氏名 ②住所 ③電話番号 を記入して
以下のいずれかの方法で「工藤 博」へ

・電 話 090-4654-8964

・FAX 086-466-0192

・葉 書 〒710-0803

倉敷市中島 2007-8

・Eメール sw225442@tw.drive-net.jp

編集後記

名誉顧問の柴田先生が亡くなりました。私にとっては高校の恩師です。設立総会での話、「不思議発見」の持論、等思い出を書かせていただきました。

丸谷さんはこれまでとは異なった視点で、「邪馬台国は岡山にあった」という論を展開して、講演を続けています。地名、太伯と鯨面（入墨面）が最低必要条件とのこと。紙面の都合で、今回は地名、太伯についての説明を載せました。鯨面（入墨面）については次号に掲載します。

高橋さんに「中国銀行 50 年史」の講演の後篇を纏めてもらいました。戦後の中国銀行の歩みです。30 年余にわたって頭取を務められた守分十氏は「自主健全経営」を標榜し、断行せられたとのこと。併せて「忠恕」の精神も掲げられたことに深い見識を感じます。不完全な人同士の集まりに「恕」の精神が欠けたら息が詰まる。

私も行きたかった蒜山の探訪、天の岩戸伝説のある地で、井上さんに感想を寄せていただきました。県内には歴史的に興味深い所はまだまだある。

能勢初枝さんから「シーボルトに関わる三人の美女の生涯、母タキ・娘イネ・孫タカコ」という興味深い原稿が届きました。娘イネは岡山に棲んでいました。今回は紙面の都合で掲載できず、次号以降に連載で載せたいと考えています。（楠）

発 行 岡山歴史研究会

会 長 大田弘之

編集長 楠 敏明

事務局 〒702-8002 岡山市中区桑野504-1
山崎泰二方

自宅電話（兼用）086-276-6654

FAX（専用）086-276-2241

ホームページ <http://b.okareki.net/>